

保険会社の写真帖一大正代生命

今年もよろしくお願ひ申し上げます。近年、年賀状の交換の習慣が薄れているが、お正月に年賀状が一枚も届かないというのも寂しい話。虚礼廃止というなら、虚礼でない年賀状を書けばよい。そう考えて、今年は月並みな挨拶ではなく、自分の1年の研究を振り返る文章を書いてみた。文章ばかりでは照れ臭いので、大正生命と福寿生命の昭和初期の年賀状の画像をレイアウトとして利用した。大正生命の年賀状は、工業デザイナーの日本の草分けといわれる杉浦非水の作品をつかっている。私が使ったのは、富士山を相模湾ごしに眺めた図柄で、のどかで平和なお正月に相応しいものだ。また富士山にたなびく雲は、杉浦が後に製作する煙草「ひかり」の図案によく似ている。

今回紹介する写真帖は、この大正生命である。大正生命は、昭和11年11月に本社の着工をはじめ、昭和13年12月に竣工した。これまで紹介した写真帖は、ほとんど営業目的で作成されたものであったが、この写真帖は、新築本社の落成を記念するという目的で作られたものである。そのためか、頁数は多くないが、丁寧な装丁がほどこされている。大きさは、縦26.0×横22.5。上質の厚紙の表紙が、11枚の写真添付頁と工事概要の頁をはさんで糸綴されている。表紙には褪せしてしまっているが、板谷梅樹作のタペストリータイトルの写真が貼られ、同社の社章と品の良いフォントで会社名などが書かれている（画像参照）。ちなみに板谷梅樹は陶芸家板谷波山の5男でモザイク作家として知られている。

生命保険会社が、本社や支社にお金をかけることが多くみられるのは、日本だけのことではない。アームストロング調査によれば、アメリカの生保会社も本社ビルを中心として不動産投資に巨額な資金を投入していたことは、モートン・ケラーの著作からも明らかである（水島一也訳『生命保険会社と企業権力』千倉書房を参照）。日本でも戦前の近代建築史の中で、公的機関、銀行などと並んで保険会社の建築が一定の位置を占めており、そのいくつかについては、この連載でもすでに紹介している。

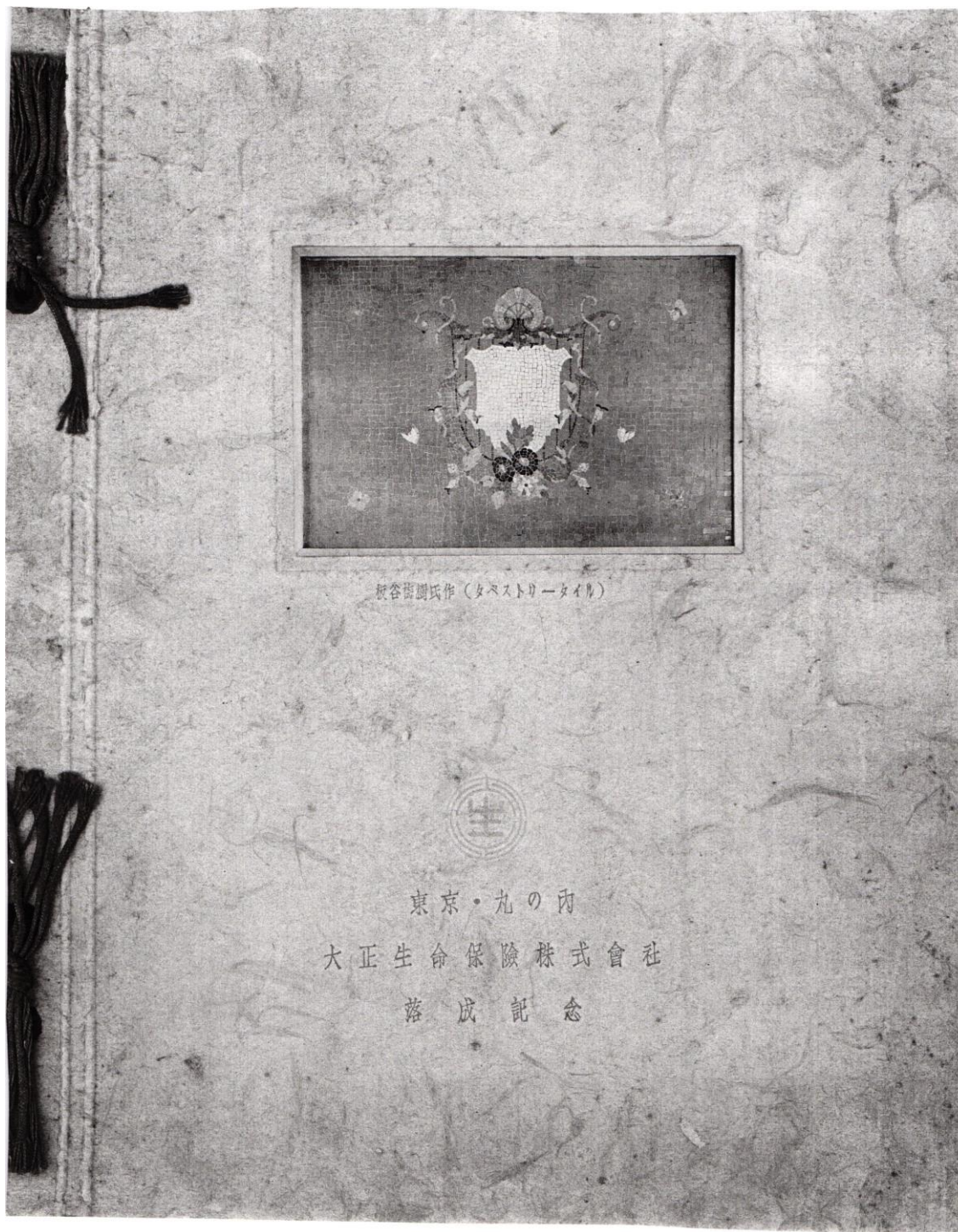
大正生命の新築本社の設計者の個人名はわからないが、株式会社大林組による設計施工と記されている。鉄骨鉄筋混凝土造、地下二階、地上八階に屋上階段室を備えた、延坪4404.723平方メートルの近代建築である。設備は次のようなものが整っていた。暖房設備、冷房設備、換気設備、消火栓設備、電灯電力変電設備、電話設備、ラジオラウドスピーカー、電鈴設備、蓄電設備、気送管設備、昇降機設備（乗用二基、人貨用一基、リフト二基）メルシュート1ヶ所。

全景は、掲載した画像に見られるように、近代的で機能的な概観。屋上の日章旗に戦時期の雰囲気が出てはいるが、建築様式そのものはとくに戦時的なものを感じさせない。玄関は、画像にみるように、洒落てはいるが華美ではない。このあたりは戦時体制と関係があるかもしれない。玄関を入ると左手に昇降機があり、その先に階段がある（1階階段室の画像を参照）。

各階は、次のように利用されている。地下二階は機械室および書庫、地下一階は理髪室、

食堂、厨房、宿直室、小使室、倉庫。地上一階は一般食堂、自動車庫、電話交換室、書庫、化粧室等、事務部門の部屋は二階以上である。二階には、経理部事務室、応接室、電話交換室等、三階には、営業部事務室、応接室等、四階には社長室、社長応接室、秘書室、重役室等、五階には医務室、診察室等、六階から八階までは単に事務室とされている。この中から、地下一階の「理髪室」、地上一階の「食堂」および四階の「社長室」の画像を掲載したい。戦前の会社に理髪室が備わっていることはよくあることだったのかはわからない。しかし、ビジネスにおける身だしなみが現代以上に重要だったことを考えると、社内に理髪室があるということは理解できなくはない。食堂室は、昼休みの時間が一斉に定時に始まるとすれば、キャパシティが大きいように見えるが、地下にも別途食堂があるので、社内の身分により利用者が分かれていたのかもしれない。社長室には、絨毯がひかれ、壁もクラシックな雰囲気をかもし出している。にもかかわらず、鏡餅が置かれているのがなんともジャパニーズではあるが。

この写真帖は、新築落成の祝賀会に配布され、大正生命の「偉業」を伝えるという役割を果たしたものと思われる。ここに社長をはじめとする人間が全く登場しないのは、この写真帖の性格をよくあらわしている。また同社の経営の特徴をも推測できるかもしれない。ある意味で商売っ気のない写真帖を作成するような社風は、年賀状に杉浦非水を使い続けたことにも通じることかもしれない。







正面玄関





理 髮 室



食 堂





社 長 室